都市計画が住民生活に与えるインパクトに関する都市人類学的考察

～ブルキナファソ、ワガドゥグ市のザカ計画 Projet ZACA の事例から～

清水　貴夫

【要旨】

ブルキナファソの首都、ワガドゥグでは、2003 年からザカ計画という都市計画が実施されている。この計画は、ワガドゥグ中心部にあったハウサ人を中心とする外国人街、通称ザングエテンの旧街区を取り壊し、そのあとに、現在の商業地区から連続した商業、行政地域を建設するというものである。この都市計画により、旧ザングエテン住民は、ワガドゥグ南縁部のトラム・ダキュイなどへの移転を余儀なくされた。

本稿では、この都市計画による住民移動が住民自身に与えた影響を検証し、住民の新しい住環境への適応、そして、生活の変化を検討することを目的とする。本稿で明らかになるのは、権力と住民との間の関係性はねじれたものではあるが、住民は権力への抵抗を示すわけではなく、現状を受入れ、移住による副産物にも気付きながら日常を生きているということである。

1. はじめに

アフリカ諸国の大都市圏では人口流入や保健衛生の向上の結果、都市人口の増大が進んでいる。都市の人口増大は、そのまま住宅問題や環境問題、さらに、スクォッターやストリートの住人、スラム街や、路上商人の存在理由に直結している。アフリカ諸政府にとって、こうしたインフォーマル・セクターに類する人びとの存在は、近代化や西欧化を阻害するものとして、アフリカ諸国政府から決して快く思われてない。その証拠に、街の美化と称して、彼らはしばしば強制的な排除の対象とされる。これらの排除は国賓や要人を迎える直前に、また、時にはなんの前触れもなく行われる。しかし、一時的な都市の「清掃」は、そもそも都市化についての根本的な解決を与えない。より「近代的」に発展を目指すアフリカ諸国は、住民にもその在り方に従うように促す。その一つが、アフリカ諸国の大都市部の急激に進む都市計画である。そして、実質的な経済発展を実現するため、アフリカの主要都市の経済、住居環境の整備は、特に緊急課題として考えられている。

本研究の目的は、ブルキナファソの首都、ワガドゥグ市において行われる都市計画、ザカ計画[1]が住民生活に与えてきた、住民生活に与えた影響の意味を検討することである。検討の方法は、人類学的手法、言い換えれば参与観察、聞き取りを中心としたデータ、および、文献資料の検討による。

なお、本論文のもとになった調査は、日本学術振興会・特別研究員研究奨励費によって実現したものである。

1.1.　近代ワガドゥグの拡大の略歴

ワガドゥグがモシ Mossi の領有する地域となったのは、12 世紀のことである（Skinner1964:17、Coquery-Vidrovitch1993:266）。それまでは、ニョニョンセ Nyonyonse、ニニシ Ninisi が領有して

[1] プロジェ・ザカ Projet ZACA (Projet Zone des activités Commerciel et Administration)。本稿では、「ザカ計画」と記述する。

いたが、南部から北上してきたモシがとってかわった。ワガドゥグは、ニジェール川沿いに散らばる、トンブクツ、ジェネと言ったサハラ交易の商業中継点と、現在のガーナやコートジボアールの海岸部、森林地帯との中間点に位置し、通商上の中継点として発展した。コックリー・ヴィドロヴィッチは、ブルキナファソ第2の都市であるボボ・ディウラッソ Bobo Diulasso と並び、南北通商の要所であったことが都市化の要因だったと述べている（Coquery-Vidrovitch1993:267)。

近代ワガドゥグが本格的に拡大を開始したのは、20世紀初頭以来である。最初の契機になったのは、カトリックミッションのワガドゥグへの入植であり、次には、第1次世界大戦勃発に伴い、フランス植民地政府が兵士募集を行ったことである（Skinner1974:27)。スキナーによれば、1945年にはワガドゥグの人口は17,800人であったが、1946年から51年までに人口は約2倍に増えたという。この間の人口増は農村からの移民とフランスの植民地支配のための外国人移住者によるものであり、現在の人口変遷とは多少その性質を異にする（Skinner1974:34)。現在のワガドゥグの輪郭は、フランスから独立した1960年頃から形づけられたと言ってよいであろう。そして、「より動態的、戦略的なワガドゥグへの人口流入」は、1980年代になって激化した（Meyer2004:35）[2]。ワガドゥグ市は、ここから周囲の数か村を飲み込み、拡大の一途をたどる。新たな街区ができ、2000年ころには、ワガドゥグ市の人口は100万人を超え、西アフリカ有数の大都市へと発展している。

1.2.　先行研究

本稿はブルキナファソの首都、ワガドゥグ市の都市人類学的研究の論考の一部である。

ワガドゥグに限らず、すべてのアフリカの都市は、極度の政治不安、経済的不調にさらされない限り拡大の一途をたどっている。その要因はまず国内外からの人口流入であり、次に集積した人びとによる自然増である。近現代ワガドゥグの都市膨張の過程と歴史・地理学的な観点から、Fournet,F、Meunier-Nikiema,A、Salem,G による研究の成果である、"Ouagadougou(1850-2004) Une urbanization difference"はワガドゥグの都市形成史研究に注目すべき足跡を残している。殊に、一般的にアフリカ諸都市で都市計画が活発だった1980年代の都市計画を大きく扱っており、この時代の都市計画が現在の都市空間形成に与えたインパクトの大きさを論じている。

都市計画は住民にとって不可抗力である。都市膨張のプロセスの一部としての政治的な力学（都市計画）に対する都市民は、抵抗、適応、順応、無関心と言った手段により「抵抗」する（松田 1996)。こうした行政と都市民の間の相克は、これまでの都市人類学でも頻繁に扱われてきたテーマであった。古くは、「状況的アプローチ The situational approach」[3]として、ミッチェルらが、バントン Banton やエプスタイン Epstein の都市民の社会変化 Social change の研究群をまとめた（Mitchel 1961)。都市計画による住民の移動は、住民生活を変化させる誘因となり、それはミッチェルらが述べるような政治的制限である。そして、松田は、都市民の生き方を、

---

[2] メイヤーによれば、1975年から1985年までの間に、移入民、自然増で年間の人口増加率は10%前後である。ニキエマ Nikiema によれば、この人口増大は1983年から1996年にかけ、ワガドゥグ市の住宅地面積は、24k ㎡から124k ㎡に増加した（Nikiema2004:51)。それ以前には、12k ㎡ほどであったという報告もある（Skinner1974:19)。

[3] 都市民が適応する都市状況の変化の外在的要因を6点にまとめた。6点とは、a)住居密度 Density of settlement、b)移動性 Mobility、c)異質性 Heterogeneity、d)人口学的不均衡 Demographic disproportion、e)経済的差異 Economic differentiation、f)政治的制限 Administrative and political limitation

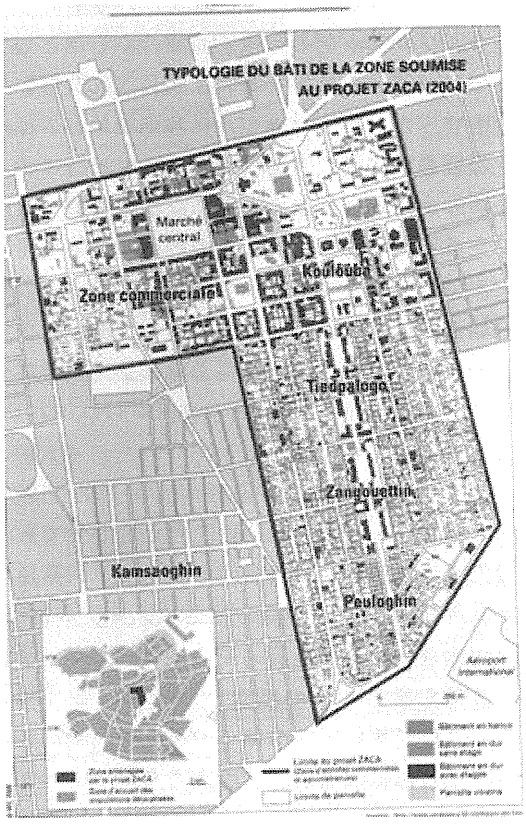
『抵抗する都市　ナイロビ　移民の世界から』にまとめ、都市民の柔軟な生き方を描いている。

さらに、和崎の都市民の再フォーク論は、都市民が生成した文化の受容と変化をとらえるうえで示唆的なモデルを提供している。アフリカの都市人類学の研究と日本の都市祭礼研究から、都市社会のなかのフォークのあり方を3つに分類する[4]（和崎 1996：345－376）。フォークは和崎が示したような祭礼や（村落の）慣習と理解しうるが、生き方や記憶まで広く解釈すれば、その地に埋もれる不可視的な街の特性を示すことが可能である。和崎が提案した「時間的うめ込まれ型」と呼ぶフォークのあり方は、殊に都市周縁においてわかり易い現象である。本稿で述べるような都市計画により、都市中心部から外縁部に移動を余儀なくされた人びとにとって、移住前の地域で成立したフォークが継続され、ノスタルジックに当時を語るような現象に見ることができるのである。

2. ザカ計画とザングエテン

2.1.　ワガドゥグ市の拡大とザカ計画

図 1.　プロジェ・ザカ実施地域



Nikiema2008 p55 より

ザカ計画は 1987 年、トマス・サンカラ前大統領施政時に計画された、ワガドゥグの都市計画である。

この都市計画が立案されたころのワガドゥグの人口は、約 44 万人に達していた。オート・ボルタ Haut Volta としてフランス植民地から独立した 1962 年の人口がが約 5 万人であるから、このときですでに 8 倍の人口を抱える都市になっていた。1980 年代には、ワガドゥグをはじめとするアフリカの都市の人口膨張は目に見える形で顕在化してきていた。人口は膨れ上がるが、この人口を支えるインフラ整備が追い付かない。この矛盾を解決するには、住宅地と首都にふさわしい行政設備の整備、さらに、経済的な基盤の再構築が 1980 年代以降のアフリカの都市行政の急務であった。こうした時代背景の中、ザカ計画は 1983 年にクーデタによって政権に就いたサンカラ[5]のもとで立てられた。サンカラ

[4] a)村落のフォークが都市に持ち込まれ、村のフォークが都市民の生活の支えとなるケース（「空間的もちこみ型」）、b)都市民の生活伝統を自分たちのフォークの源としているケース（「自生型」）、c)中心市街地の人口膨張や後背地の村々からの人口集中による人口増加によって、連続的な市街地のなかに在郷町が埋まってしまうケース（「時間的うめこまれ型」）（和崎 1996：360－362）

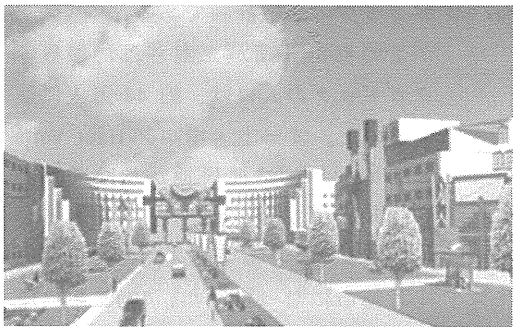
[5] サンカラ Tomas Sankara 大佐が 1983 年にクーデタにより政権を奪取。現大統領のブレーズ・コンパオレ Braise Compaoré はサンカラの盟友として、このクーデタにも参加していた。サンカラ元大統領は、

大統領在任中には、ザカ計画以外にも、1987年にグラン・マルシェ Grand Marché[6]が建設され、ワガ・ドゥ・ミル Ouaga2000[7]の建設が計画された。この二つの計画とともに、ザカ計画は、ワガドゥグの都市計画の目玉として実施されることになっていた。

図1はザカ計画の予定地域である。対象地となったのは、クルバ Kouloube からワガドゥグ国際空港の間の約200ha である。

ザカ計画は、ザカ1とザカ2に分けられる。ザカ1はゴンピドゥ通り Ave. Gompidou[8]の「近代化」を目的とした。ゴンピドゥ通りは、ピュロゲンからクルバにかけての中心を北に伸びる通りで、この北の端に国連交差点 Rond point Nations Unis がある。すでに、このザカ1については完成している。「近代的」な重層階の建設物が立ち並び、それらは銀行、高級ホテル、飲食店や遊技場である。昼間はビジネスマンや仕事で来た外国人の姿が多く、夜は、飲食店や遊技場のネオンが光り、現在のクワメ・ンクルマ通りは、ワガドゥグで最も煌びやかな街として、ワガドゥグの「近代化」のシンボルともなっている（参照図2)。そして、このクワメ・ンクルマ通りの両側にザカ2、つまり、通称ザングエテン[9]と呼ばれる地域がある。ザカ2の地域は、この約85ha の地域が対象となっている。

図2.　プロジェ・ザカ完成予想図



Projet ZACA パンフレットより

ザカ計画は、行政商業地域という名のとおり、ワガドゥグの行政、商業の中心地として開発が進められている。すでに2005年から各官庁がワガ・ドゥミルに移転を始め、行政機関の移転は開始している。そして、ザカ1についても、上記のように商業地帯の一部は完成しており、次第にこの計画の全貌が明らかになってきている。さらに、この一連の地域に、ワガドゥグの経済の中心である、グラン・マルシェと卸売の盛んなグラン・モスク Grand Mosque 周辺の商業地帯が付け加わり、ブルキナファソの一大商業地域となる地域であると目されている。

ザカ計画事務局が述べているように、ワガドゥグ市は、平板で中心性がない都市である（Projet ZACA:2)。また、近年、ますます上がるワガドゥグ市の人口集積性を考え合わせても、商業地帯は極端に小さく、多くの商業従事者は個人で小規模店舗を経営するのみで、同業種の集合地域もない。プライベートの会社組織も少なく、事務所も公的機関や社会インフラ事業[10]以外は小規模で、必ずしもこの商業地域にあるわけではない。この経済的中心性の欠如が、ザカ計画が指摘するところの「都市機能不全状態」に陥らせた最大の原因となっている（Proje ZACA：2)。ザカ2計画は、こうした、小さいながらもグラン・マルシェやグラン・モスク近辺に集中する卸売を中心とする商業地域を拡大させるために実施されようとしている。

その後、1987年にコンパオレにより打倒されるが、現在に至るまで国民的英雄である。

6 正式名称はルード・ウォコ Rood Woko

7 ワガドゥグ南部に新たに作られた街区で、新大統領府、官邸、各省庁、外交使節、高級住宅の建設が実施されている。いわば、新都心的な街が目指されている。

8 現在のクワメ・ンクルマ通り Ave.Dr.Kwame Nkruma

9 行政地図上は、クルバ Koulouba、チェドパロゴ Tiedpalogo、ザングエテン、ピュロゲ Peuloghin の4地域のことを指す。

10 電力、電話、水道等

ザカ計画事務局によれば、この都市計画の目的は、1.都市の部分的再開発、2.都市空間を分割しなおして有効利用すること、3.都市イメージの改善、4.商業機会を増大させること、5.地域の複合的開発、6. 画一的、現実的な規則的処置の 6 点である。次節で述べるように、ザングエテンはワガドゥグ市における一大商業地に隣接する住民の集積地である。しかし、独立以降、急激な人口増大の途上にあるワガドゥグ市の近代的経済活動は、グラン・マルシェ、グラン・モスク周辺の狭小な地域にあるのみである。事務局が述べているように、確かに、100 万人を超える、一国の首都の商業地域としてのまとまりは薄い。商業地域の拡大、再整備については、「ザカ」という商業・行政地域を示す名称からもうかがえることであるし、プロジェクトの目的においても、4 や 5 で強調されていることでもある。

以上のように、ザカ計画が計画された背景には、ワガドゥグ市の急激な人口膨張によって必要に迫られた都市機能と「近代的」な都市づくりを指向する行政の意向が強く働いたことが分かった。この計画の実施には、計画から 20 年以上が経過されているが、行政は粘り強くこの計画を進めていることが分かる。それでは、このザカ計画が実施されたザングエテンという地域はどのような地域であったのか。次項では、ザングエテンについて論じていく。

2.2.　「外国人の街」ザングエテンの成立

ザングエテンは、ワガドゥグ中心部に位置する住宅地であった。聞き取り調査で明らかになったのは、西アフリカに広く分布するハウサの人びとは、各地にハウサ集住地域を作り、それぞれの都市でコミュニティを形成してきた。ザングエテンの呼称の由来は、「ザンゴ」や「ザング」はモレ語でハウサ自身を指し示す呼称である（川田 1980）。

ザングエテンにはこの呼称が示す通りハウサ系の人々が多かった。しかし、そこに住んでいたのは、ハウサ以外にヨルバなどのナイジェリア出身者やガーナ出身者がこの地域の多くを占めていたと言われ（Skinner1974:43）、一種の外国人街を形成していた。モシの旧住民への聞き取りでは、この街を「外国人の街 ville d'étranger」と呼ぶ人も多く、この街がワガドゥグの主要民族であるモシの人びとにとっても移民の街と認識されていたことが分かる。ただし、この外国人とは、ハウサのことを指すことが多い。この地域をまとめていたのは、外国人の長 chef d'étranger と呼ばれる人であり、この長はハウサの一家が代々継いでいる。ワガドゥグにおけるハウサは、ヤルセ yarsé、ディウラ dioula 等と並び、重要な商業の担い手である（Skinner1964:67, Coquuery-Vidrocitch1993:238-239 等）。西アフリカの貿易路の中継点としての重要性を持つワガドゥグにとって、ハウサをはじめとする商業諸民族はワガドゥグ成立に重要な意味をもった。よって、ザングエテンという、ハウサを冠する地名やこの地域の長がハウサであるといったことなどで、ハウサの人びとがワガドゥグで優遇されてきたことが分かる。

ザングエテンのハウサのつながり、さらに商業地域としての発展の結果は、ナイジェリア北部とザングエテンのつながりにも見ることができる。一例として、2003 年まで、この地域からカノ Kano、ラゴス Lagos への直行バスが運行していた。ワガドゥグからラゴスまで、陸路で約 40 時間と言われたこのバスは、毎週 2 便から 3 便があったと言われるが、毎回このバスは満席で、大量の荷物が屋根上に乗せられていた。

さて、シドワヤ紙に掲載された政府による記事では、ザカ計画で一掃された 85ha の敷地に 50,000 人から 75,000 人の人口を抱えていたと報告されている（Sidwaya2003.1.9）。その人口密度は、この地域で最も多いところで 866 人/ha（1996 年）で、ワガドゥグ全体の 97.4 人/ha（1996

年）と比べると、ワガドゥグの中でも特に高人口密度地帯であったことが分かる（Nikiema2008:52,53）。この高密度の人口は、この街をとても清潔とは呼べない街にした。これは筆者が世界でも最も清潔であるといわれる日本から来たからそのように感じたわけではなく、ワガドゥグの住人ですら、ザングエテンを説明するときに不潔（Sale）という言葉と共に語るほどである。ザングエテンに足を踏み入れると、日中の気温が 40 度を超える乾期であっても、路上に廃棄された生活排水のために地面はぬかるみ、過剰な人口密度のために汚水があふれ、街路に滞留し、常に街にはアンモニア臭に近いにおいがしていた。

ザングエテンは、モシ王国の王である、モロ・ナーバ Mogho Naaba から、ハウサ商人たちが住まう場所として与えられた土地である。その名称やワガドゥグの成立過程から、ハウサは、マンデ系商人と並び、経済的に重要な位置を占めており、王宮に隣接する土地を与えられたものと考えられる。一方の商業民族のマンデ系はモシと同一化したが、ハウサは独自の長[11]を掲げ、現在のナイジェリア、ニジェールとの交易を近年まで継続していた。（Cordell&Gregory&Piché1996:50-55）そして、ザングエテンはハウサやヨルバと言った、古くからイスラームを強く信仰してきた人びとが中心に出来上がった地域であり、当然の成り行きとしてこの地域はムスリムの多い地域となった。歴史的に、ワガドゥグのイスラームは、ハウサやマンデ系のイスラーム商人によって持ち込まれたと言われる（Skinner1974、Cordell & Gregory & Piché1996 など）。ワガドゥグを統治していた、モシの王、モロ・ナーバがイスラームに入信するのは、比較的新しく 19 世紀後半であったが、これらのイスラーム商人により、市井には 15 世紀ころイスラームはすでに浸透していた。

ザングエテンに隣接するサン・レオン Saint Leon と呼ばれる地域がある。サン・レオンとは、初期のカトリック・ミッションの聖人の名から取られた名前である。この名にちなみ、1934 年のカテドラル建設前後に、カトリックの住居地として、モロ・ナーバから与えられた土地である。この街区は、現在に至るまでカトリック・ミッションが取り仕切っており、行政もこの地域には手をつけられていない。この地域は以上のような経緯で、カトリックの多い地域である。このモロ・ナーバの宮殿に隣接する 2 つの地域は、イスラームとカトリックの住み分けを目的として区分けされた地域である、ということができる。

写真 1.プロジェ・ザカ

（2009.2 筆者撮影）

ザングエテンと呼ばれた地域はここだけではなかった。もともと、ハウサの人びとが居を構えたのは、現在のワガドゥグの鉄道駅があるあたりだという。現在では鉄道駅の周りに、電話局や郵便局本局、携帯電話各社の本店が軒を連ねる市民サービスの中枢が集まる地域である。この地域から、少し北側の、現在のシテ・アン・トロワ Cité AN Ⅲと呼ばれる地域までがザングエテンであったという。聞き取りによれば、2003 年にザカ計画の対象となったザングエテン

[11] 上述の外国人の長のこと。

は、2 世代ほど前に出来上がった地域となる。

ザングエテンの住民は 2 度の移動を求められたことになる。最初の移動の際はザカ 2 ほどの混乱は見られなかった。これについては次のような説明がよく聞かれた。最初の移動もサンカラ政権の元で行われたが、このときは、サンカラ大統領自身が住民の説得に赴き、大統領自身が重機の運転を引き受けたという。そして、住民に対しては、腰を低くして、必要な住民にはコットンの地布を贈って誠心誠意の説得が行われた。ゆえに住民は快くその土地を引き渡し、潤滑な移動がなされた。こうして、2003 年まで存在したザングエテンが成立した。

2.3.　ザカ計画によるザングエテン住民の移動

ザングエテンの 2 度目の移動はザカ計画（ザカ 2）に際して行われた。

最初の移動が静かなものであった一方で、2 度目の移動は、5 回の住民デモが行われるほど荒れたものとなった。住民たちは、AJZ(ザングエテン若者組合、Association des juness Zangouettin)を組織した。AJZ 会長の A 氏によれば、最初の 4 回のデモは、行政に対してザカ計画の取りやめと移動の拒否を示したものだった。まず、住民たちは住民都市化省 Ministre l'habitat et l'urbanization、大統領府への行進という手段をとり、市井にアピールした。ザングエテン取り壊し前夜、すでに多くの住民が新たな住処へ移動した後に行われた 5 回目のデモが最も激しいものであった。5 回目のデモでは、かねてより配備されていた警察と住民組織の間に衝突が起こり、暴動となった。結局、約 30 名が MACO[12]に移送され、事態が落ち着く 1 カ月後まで留置されるほどに大規模なデモに発展した。このデモの様子は、旧住民たちへの聞き取りからわかったことだが、これほど激しいデモであったにも関わらず、新聞等への記事は一切ない。

これらのデモ、衝突の原因は、第一に当時の生活拠点から移動することに対する住民の抵抗運動の様相を呈していた。しかし、もう一つの原因が、自らがザングエテン出身であった、ザカ計画推進派の住民都市化省の高官による汚職疑惑、行政の強硬な姿勢であったという。確かに、行政は住民との対話を何度も行い、説明を行ってきた。新聞上にも、3 回の対話の呼びかけがなされている（Sidwaya Paalga 2003.1.2、2003.2.3、2003.3.3 など）。そして、政府側からは、最終的にいくばくかの保証金[13]が支払われていた。しかし、とりわけ、住民がザングエテンに愛着を持っていたにも関わらず、最終的に行政側の方針を住民に押しつけた側面は否めない。さらに、この政府高官は、自らが生まれ育った故郷を私利のために行政に売り払った、という噂が立ち、住民たちをより激しい抵抗へと駆り立てたという。

それでは、なぜザングエテンがザカ計画の対象地として選ばれたのか。まず、ザカ計画の目的にもあったように、商業・行政地域の拡大は、現在のブルキナファソ経済にとって最も早急に行われなければならない都市計画であった。そして、さらに、ニキエマが、「街の中心街に古くて汚い街区があることをもはや有益なこととは認められない」（Nikiema2008:54）と行政の見解を示しているように、ザングエテンがザカ対象地域として選択された背景には、商業地区と隣接していること以外にも、この地区の浄化もひとつの理由として挙げられているのである。

反対運動の盛り上がりを傍目に、2003 年 11 月 8 日、すべての住民たちはザングエテンを離れ、新たな生活の場を求めて移動した。住民の移動先は、さまざまであった。ワガドゥグ南部

---

12 ワガドゥグ刑務所 Maison d'arrête et de correction de Ouagadougou のこと

13 舗装道路沿いの土地が 40,000Fcfa/㎡、街区内が 25,000Fcfa/㎡

に行政が用意したトラム・ダキュイ、サーバのトラム・ダキュイを中心に、ある者は家族や友人の元へ転がり込み、ある者は新たに家を購入し、また、借家を探した。また、中には、ザカ計画前に他所に移動した家族も少なくない。A 氏の一家もその一つで、A 氏の父は、「政治で決定したことは、遅くなっても必ず実行される」とし、ザカ計画が実行されることが決定した時点で、移転することにしたという。A 氏の一家は、2000 年には、ザングエテンを離れ、市東部に土地を買い、家を建てて移り住んでいる。

ワガドゥグの「近代化」の象徴として、ブルキナファソ政府は、住民との間の軋轢を含みながら、ワガドゥグの原風景を醸し出していたザングエテンの非「近代的」家屋群を取りつぶした。施工後 5 年を経た 2009 年現在でもようやく主要道路の舗装化が終わった程度である。この間、ザングエテン住民の生活はどのような変化があったのだろうか。次章では、旧ザングエテンの人びとの生活について論じていく。

3. 旧ザングエテンの生活～家族的地縁の世界

聞き取り調査は 30 名ほどに対して行った。ザングエテンは「民族の交差点 Carrifour des ethnis」と呼ばれるほど多民族性を有した地域であった。しかし、その多様性の中で、旧ザングエテン住民のすべてが、ここの人間関係を「家族 Famille」という言葉を使って説明した。

旧ザングエテンに住んでいた人びとは、日々顔ぶれが変わり、不特定多数の人が小さな家屋に寝泊まりする、という光景がよく見られた。この街区の悪臭やぬかるんだ路地は、多くの人に、この街を「スラム」として説明させた。しかし、この街は、実のところ、住民が言う「家族」的と呼ぶほどの密接な人間関係のある地縁世界が展開していた。旧住民が語った「家族」ということの意味を考えてみたい。

ザングエテンの家屋の多くは、中庭を囲むようにして、狭小な部屋が 5 軒から 10 軒ほど立ち並んでいた。各敷地は、バンコ Banco と呼ばれる日干し煉瓦で囲いがなされ、家屋自体もバンコ、もしくは少し経済的に余裕のある場合、セメント入りのバンコないしセメントのブロックで作られていた。一部屋は、サロンと寝室があり、洗い場とトイレは共同、調理は中庭で行うことが多い。

事例として、M 氏の父が所有していた敷地と、O 氏の父が所有していた敷地の生活の様子を挙げることにする。

M 氏と A 氏が住んでいた敷地を例に描写してみよう。約 10m 四方の敷地に中庭を囲むようにして 10 軒の部屋がある。それぞれの部屋はサロン 1 部屋、寝室 1 部屋で統一されている。この敷地は M の父が所有しており、M の友人数名がこの敷地内に住んでいた。この敷地に住んでいた L 氏は M 氏の古くからの友人で、この敷地のひと部屋をあてがわれていた。L 氏、M 氏によれば、L 氏はこの間、一度も家賃を払わず、そのことを L 氏、M 氏、さらに M 氏の父までも容認していたという。また、他に 8 名がこの敷地内に住んでいたが、実際に家賃を支払っていたのは、出入りが頻繁だった 4 名のみだった。L 氏はこのころから塗装業を営んでいるが、収入があると、食事や茶を振る舞うことがあった程度で、他にこの部屋の家賃として金品を払ったことがない。他の 3 名の M 氏の知人が M 氏のような処遇で住んでいた。ほかの 4 部屋は、しばしば住人が変わっていたが、住民の多くはヨルバ人で、家賃収入は彼らが支払う毎月 7,000Fcfa のみであった。

O 氏の父はイスラーム社会の有力者で、ザングエテンでも有名な裕福な家庭を築いていた。

O 氏の父は、3 人の妻を持ち、ザングエテンの舗装道路沿いに大きな敷地を保有していた。よって家族は大変な大家族で、それぞれの妻が 7 名の子どもを持ち、常に 30 人近い人数の家族がいたという。O 氏によれば、これだけの大家族であったにも関わらず、常に家には客の姿があり、それが当り前のことであったという。

ザングエテンの社会の子どもたちへの対応についての語りも情報提供者で一致していた。ザングエテンの多くの家庭では、子どもたちは敷地内のひと部屋を与えられて、数人で共有していた。つまり、子ども部屋があったということである。仕事があるなしに関わらず、親は多くの場合、街へ出るなどして仕事を探している間は、同じ敷地の他の大人がすべての子どもの親の代わりだった。子どもがいたずらをすれば、どこの子どもかわからなくても叱りつけられたし、それが当り前のことだった。L 氏は、「ザングエテンの子どもは誰が親だかわからないほど、親以外の大人に懐く子どもがいた」ということを述べている。

以上のように、旧ザングエテン住民が述べる「家族」的ということは、ザングエテンが、持つ者は自らの家族に与えるように、無償で与え、持たざる者でも暮らしていける空間であったということである。ここでいう、「家族」的とは、限られた関係を持った知人に限られている。このホスピタリティは、M 氏や L 氏などによれば、イスラーム的なのであり、イスラームの客を扱うように、すべての人を扱っていたために「家族的」に感じていたのだという。

こうした「家族」的な関係は、同世代間における親密な関係性の中により強く見出すことができる。各世代間の関係性は、茶会において培われた。

ザングエテンでは、毎日、殊に夕方になると茶のにおいが立ち込めた。茶を囲む若者の姿はザングエテンの家族的社会関係と客を歓迎するザングエテンの気質を象徴するものであった。

夕方になっても日差しの強いワガドゥグでは、木蔭や蓆を張った屋根の下、涼をとりながら炭火をおこす。仕事がある者は、仕事から帰って水浴びをしてから、仕事がない者は早い時間からこうした日陰に集まる。茶を入れるポット、グラスや炭を持つ者が道具を持ってくるとティ・セレモニーが始まる。ティ・セレモニーで使用されるのは、香港から輸入される緑茶、テ・シュバル Thé cheval である。西アフリカのティ・セレモニーに特有なのは、小さなやかんで水から煮出して砂糖を大量に入れることである。このようにして沸かした茶を、30cc ほどの容量のガラス容器とやかんの間を何度も注ぎ直して、空気を入れ、泡だてて飲むのが美味しい飲み方とされる。最初に沸かした茶がなくなると、同じ茶葉に水を入れ、再度同じことが繰り返される。これが 3 度ほど同じことが繰り返される。炭火で沸かすため、茶を煮出すまでに 30 分、茶を泡立てるのに 30 分ほどかかる。つまり、これが 3 回繰り返されるとして、3 時間ほどかけて一回のティ・セレモニーが終わる。この間、途中からの参加も途中で席を立つことも許されており、途中のイスラームの祈祷の時間には一時中断する。

毎日長い時間をかけて行われるティ・セレモニーは、ザングエテンの生活にもう一つの定点を与える。ティ・セレモニーに集まる人びとは年齢階梯的で、あまりに年の離れた者は入れない。ティ・セレモニーを行うのは、多くは 20 代から 30 代の男性である。ティ・セレモニーの場で就職の情報を得て定職に就くことができた例があり、また、新たな出会いの場でもあった。単に夕涼みに友人たちと茶を飲んでいるわけではなかった。

ティ・セレモニーは、ザングエテンの若者にとっての情報交換の場であり、同世代間の関係を強めていく機能を果たしていた。こうしたティ・セレモニーの機能はザングエテンに限ったことではない。しかし、ザングエテン取り壊し前後の混乱をきたしていた時期には、夕方、こ

のように若者が集まってお茶を飲んでいると、しばしば警察に暴力を振るわれた、という。すなわち、ティ・セレモニーが若者たちにとって重要な情報交換の場であることは、周知のことであることが分かる。

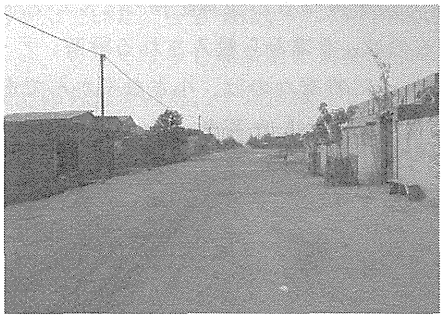
ザングエテンが決して住環境がよかったわけではなかったことは、旧ザングエテン住民の誰しもが認めるところである。政府が指摘したように、汚く、極度に人口密度が高く、そして決して豊かな人びとの街ではなかった。しかし、貧しい中にも、もしくは全ての人が一様に貧しかったからこそ、ザングエテンの人びとは濃密な社会関係を結んだ。そして、そこで培われた近所づきあい、友人づきあいは、それから6年を経た現在に至るまで脈々と続いている。言葉上の「兄弟」や「親子」関係は、しばしば血縁関係に関係なく使用されることがアフリカの常であるが、旧ザングエテン住民にとっての親兄弟の関係には、正に家族的な依存関係を見ることができる。そのため、地縁にのみ因っていても、「家族的」な関係が成立しえたのである。

4. 新天地へ：トラム・ダキュイを中心に

ザングエテンを後にしたハウサを中心とする人びとは、新たな住処を見つけ、新たな生活を始めている。ある人は自分の親元の近くに家を借りているし、レストラン経営の女性は旧ザングエテン近くに新たに店を構え、ザングエテン時代よりも大きな商売を展開している。ザングエテンを追われたことが、正負のあらゆる意味で人びとの生活に変化を及ぼしている。聞き取りの結果、次の3点を生活の変化とする人が多かった。

4.1　周縁化する住民生活

写真 2.トラム・ダキュイ



（2009.3　筆者撮影）

トラム・ダキュイは、ワガドゥグ中心部、グラン・マルシェから約 10 kmのところに位置する。この地域の隣には、新都心である、ワガ・ドゥ・ミルが控えている。そして、この南側は広大なブッシュが広がっている。つまり、トラム・ダキュイは現在のワガドゥグの南縁部にあたる場所に位置している。

この地域は、旧ザングエテンの住民のためだけに切り開かれたわけではない。自然拡大するワガドゥグの中心部は慢性的な土地不足であり、新富裕層らはこのあたりの土地を買い、華奢な住宅を建てる。旧ザングエテン住民が、ザングエテンさながらの狭小な住宅に膨大な数の家族とともにひっそりと暮らしている住宅と見比べると、明らかな格差がみえる。トラム・ダキュイは、こうした大小の住宅が混在した、新興住宅街にあたる。

しかし、新たに切り開いた土地であるがための不便さは、トラム・ダキュイ住民の多くが指摘するところである。2009年に診療所こそ開業したが、現在に至るまで、住民の台所たるマルシェがなく、学校もない。水道の工事も進んでいるが、多くの人々は公共水道に頼っている。水をドラム缶で買わなければならず、日々の水の供給も大きな問題であるという。また、イスラームが多いハウサが大部分を占めており、モスク建設予定地は確保されているが、6年間遅々

として工事が進まず、現在まで仮設モスクで礼拝をすることになっている。これらの生活インフラの不備はトラム・ダキュイ住民の生活に深い影を落としている。

T 氏は、旧ザングエテンに生まれ育った。先述の A 氏とは無二の親友である。T 氏と A 氏は、ザングエテン若者組合で共にザカ計画の反対運動を戦い、最後まで戦った同士でもある。A 氏の父は、ザカ計画の話が持ち上がってすぐに郊外に土地を買って新たな生活をはじめ、A 氏家族は現在も、そこに居を構えている。しかし、T 氏一家は、2003 年 11 月、住宅の取り壊しが始まってからトラム・ダキュイの現在の家の建設に取り掛かった。2007 年にようやく家が完成し、T 氏以下兄弟一同での生活が始まった。T 氏一家は、男のみの 7 人兄弟で、すべての兄弟家族が同じ敷地に住んでいる。大人が 13 人、子どもが 23 人と 30 名以上が狭い敷地に同居していることになる。この家族は、食費、住居費等、生活費を共同で支払っている。毎日の食材の買い出しは、交通費がかかるために、妻たちの一人が交代で行っている。男性たちの多くは、市中心部の問屋や手工芸品アトリエで働いており、昼間はほとんど家にいることはない。子どもたちは、午前中は隣の地区にある学校に通い、午後には近くのコーラン学校に通っているという。家族でのこうした光景は、ザングエテン時代とほとんど変わらない。

ザングエテンがそのまま移ってきたようなトラム・ダキュイの生活ではあるが、住民からは悪化した生活水準の話を聞くことが多い。トラム・ダキュイから市中心街までの約 15 ㎞を自転車で行けば往復 3 時間かかる。ワガドゥグ市民の多くが利用する自転車バイクで行けば片道 30 分ほどで中心街に出られるが、軽油代が往復 500Fcfa（約 100 円）ほどかかる。一家の一日の食費が 2,000Fcfa 程度であるから、買い物に行くだけで、以前よりも 25%上がる計算だ。

周縁部への移住は、中心部の商業地域への人びとのアクセスを分断した。生活インフラの整備の遅れもこれを助長している。確かに、旧ザングエテン住民間の「家族的」協調関係は保持されているが、現在までのところ、人びとの生活を圧迫していることは間違いない。

4.2　グラン・マルシェとトラム・ダキュイ：停滞する経済活動

奇しくもザカ計画が行われた同年 2003 年 5 月 27 日、ワガドゥグで「最大の近代マーケット」（Sidwaya2003.5.28-29:2）であるグラン・マルシェが焼失した。ここで働いていた数千人の人びとが焼きだされた。グラン・マルシェには、衣料を中心に、食品、民芸品、文房具などが販売されていた。中でも重要だったのが衣料品や手工芸品であるが、これらに深くかかわっていたのがハウサの人びとであり、その多くがザングエテン住民であった。ハウサの人びとのなりわいの代表的なものは、通商活動であったと述べたが、一方で、藍染め indigo や装飾品もハウサの重要な商業資源であった（Coquery-Vidrovitch1993）。

2009 年 4 月、約 6 年ぶりにグラン・マルシェが拡大再開した。グラン・マルシェの周囲には行き交う人の数も熱気が戻ったように見えるが、当のグラン・マルシェ内のブースには空きが多く、さらに、客の数はほとんど見当たらない。

A 氏はビーズネックレスづくりで生計を立てている。約 6 年半の間に、A 氏の流通経路もいくつかの部分で変わった。品物づくりは、A 氏の自宅と、グラン・マルシェからほど近いハウサ手工芸品工が集まる地域で行われ、グラン・マルシェ閉鎖期間に、その場所自体で取引が行われることが多くなった。この流れはグラン・マルシェが再開した現在も継続している。これには、もうひとつの理由がある。それは、新しいグラン・マルシェにブースを構えるために、火災以前にブースを所有、ないし借りていた商人に優先的にその場所が与えられたが、賃貸料

は月に 25,000Fcfa と非常に高額になった[14]。それに追い打ちをかけるように、前項で述べたように、グラン・マルシェで働いていたザングエテン住民が離散したことにより、交通費がかかるグラン・マルシェを利用しない商売が成立するようになった。ザカ計画が狙った商業地帯の建設は、こうした不運な事故も相まって行政が指向した方向とは裏腹に、むしろ商業機会の求心性を失いつつある。

4.3　個人化/都市化/近代化する若者たち

ここまでを見ると、ザカ計画は現在までに経済的な効果をさほど挙げていないのが分かる。そして、旧ザングエテン住民は、慣れ親しんだ土地を追われ、周縁に追いやられたように見える。経済の中心の担い手であったザングエテン住民を中心から大きく遠ざけ、工期の遅れから、いつしか「ザカ」と呼ばれるようになった旧ザングエテンは、安全と言われ続けたワガドゥグの治安を落としている。

しかし、こうした中で、最も激しくザカ計画に抵抗したザングエテン若者組合の A 氏や、L 氏、さらに O 氏は別の視角から旧ザングエテンの若者たちの動向について指摘した。それは、ザングエテンが破壊されて以降、若者たちが自ら仕事を探し、日々勤勉に働かなければならなくなった、というである。これは当然の話で、それまでのザングエテンは働かずとも、誰かが食事を提供し、友人や友人の親の持つ部屋を無料で借りていた環境から、すべて自らの手で賄わなければならなくなったのである。

当然、日々の仕事はワガドゥグの一般的状況から考えれば、たやすいものではない。しかし、ある意味、都市のごく一般的な状況に身を置くことになった若者たちは、この 6 年間で毎朝仕事に出かけるようになり、家庭を築いたものも少なくない。

L 氏に部屋を貸していた、M 氏の父は、ザカ計画が始まる直前に他界し、財産は M 氏の家族で分与した。M 氏はザカ計画のため、ザングエテンの家から、分与された財産を元に、ワガドゥグ市南部に部屋を借り、妻を迎えた。それまで決まった定職がなかった M 氏は、運転手としてレバノン人の元で勤務している。しかし、M 氏の給与は 45,000Fcfa[15]ほどでしかなく、月の家賃 20,000Fcfa を支払うと、食費等を賄うのも一苦労だという。

一方で、M 氏の父が無料で部屋を貸していた L 氏は、ザングエテン取り壊しの瞬間まで残っていたが、その後、両親が住む家に一時移り住んだ。その後すぐに家族の家の近所に新たに部屋を借り、新たな生活を始めた。ザングエテン在住時から、看板のデザインや家屋の塗装、さらに、自動車免許を利用し、日本の NGO のドライバーをすることもあった。しかし、新たな生活を始めてからは、塗装業の方が軌道に乗り出し、現在もワガ・ドゥ・ミルに新たに建設された家屋の塗装業で忙しくはたらきまわっている。

先述の O 氏もザングエテンで生まれ育った一人である。O 氏の父はザカ計画前年に他界したが、それ以前から、すべての財産は 3 人の妻に与えること、また、家族はいつも一緒に暮らすことを遺言していた。O 氏は、2000 年に結婚し、ザカ計画が始まる前に独立する。家族は、ザカ計画によってザングエテンを退去することになるが、現在はトラム・ダキュイで 3 人の妻とその子どもたちが同じ敷地内で暮らしている。長兄である O 氏にとって、従来、その家族は O

---

[14] 以前のグラン・マルシェの賃貸料は不定で、7,000Fcfa であったり、10,000Fcfa、時には徴収を受けないこともあったという。

[15] 約 9,000 円（€1=655.957Fcfa、€1=￥135）

氏が世話をしなければならないところだったが、3 人の母とその家族はそれぞれが自立し、これまでの約 10 年間で O 氏に負担をかけることはなかったという。

ザカ計画によるザングエテンからの離散から 6 年近くが経つ。当然のことながら、仕事で成功した者もいれば、生活のセーフティネットを失い、貧困のどん底に陥れられた者もいないわけではない。すべてがザカ計画に起因するわけではないが、間違いなく、ザングエテンにあったような「家族的」地縁関係は薄れている。生活の単位は、地縁から家族、もしくは核家族、個人へとシフトしてきていることが上の 3 つの事例から読み取れる。こうした「個人化」のプロセスを「近代化」と呼べば、皮肉にもザカ計画が狙ったワガドゥグの「近代化」と重なることになる。これらの現象をどのようにとらえるべきか、本論の最後に、これまでの議論をまとめ、考察を加えることにする。

5. 考察と結語

ザカ計画はアフリカに頻繁に見られる都市計画の一つである。行政の立場から考えれば、アフリカ都市部の急激な人口増加とグローバル化する経済を裁くため、急速な経済的インフラの整備の要請に応えたものが、こうした都市計画である。その結果、暴力的な反対運動が起こり、市民生活を混乱に陥れる。さらに、恒常的な資金不足に悩むアフリカ政府の対応は不十分なものであることが常であり、混乱は形を変えて人びとの生活に影響を与える。

ザカ計画も行政、権力と民衆の間にねじれを生み出し、人びとの生活を大きく変えた。ザカ計画事務所の T 氏は、「様々な変化があったが、市民生活は一般に良好になった」という。確かにトラム・ダキュイでは、バンコづくりだった家はコンクリートブロックになって耐久性が増したし、汚水が流れ出ていた街路は、砂利が引かれ、清潔になった。

それまで、「家族的」地縁社会の中で、働かずとも食住が保障されていた環境から、他地域の人びと同様に自らの手で稼ぎ、家賃を払い、食費をねん出する必要が出てきた。近代化の要がカネと物質、サービスの交換にあるなら、行政が指向したように、旧ザングエテン住民そのものも近代化されたのである。若者たちが独立し、日々、少なくとも仕事を探すことになっている。ザカ計画の副産物として、このことを歓迎する向きも少なくない。しかし、その反面、より苦しくなった生活と、周縁への移動は、生活の近代化の代わりに、旧ザングエテンに見られた不遇な人を吸収できる柔軟な社会性を奪い去ってしまったように見える。それは、多くの旧住民が旧ザングエテンの生活を懐かしむ声に象徴される。逆に、ザカ計画への恨みは、多くの旧ザングエテン住民が、ザカ計画による失意の中で命を落とした老人が数多くいたと述べることで表明され、旧ザングエテンの生活をさらに美化する。ザカ計画が住民にとって「望んだことではなかった」ことは明らかであり、近しい者通し、肩を寄せ合うようにして生活した時代を、「家族」的と述べる。ザングエテン的「家族」の再実現は、困難になった実生活とリスクを分担していた隣人の離散によって、現実的なものではなくなった。ただ、現在でもザングエテン時代からの友人との間には、若者の間では茶会を通じて継続的に結束が保たれ、他の世代においても、異なった形の結束が保たれている。ザカ計画をめぐる住民の生活変化は、都市社会の組み換えの過程であり、ザングエテンでの「家庭」的社会の「再フォーク化」の過程であるのかもしれない。

参考文献

Coquery-Vidrovitch, Cathorine

1993 *Histoire de villes d'Afrique noire: Des origines à la colonisation* Albin Michel

Cordell,D.D.,Gregory,J.W,Piché,V

1996 *Hoe & Wage: A social history of a circular migration system in west Africa* (African modernization and development series) Westview Press

川田順造

1980「モシ族における王都の諸性格」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

Meyer, Pierre-Erwann

2008a De Bancoville à la ville moderne (Floraence Fournet, Aude Meunier-Nikiema, Gérard Salem 2008 *Ouagadougou (1850-2004) Une urbanisation différenciée*)IRD éditions pp.25-38

2008b L'impact de la Révolution de 1983 (Floraence Fournet, Aude Meunier-Nikiema, Gérard Salem 2008 *Ouagadougou (1850-2004) Une urbanisation différenciée*)IRD éditions pp.39-48

Meimoer-Nikiema, Aude

2008a La place de Ouagadougou dans le réseau urbain (Floraence Fournet, Aude Meunier-Nikiema, Gérard Salem 2008 *Ouagadougou (1850-2004) Une urbanisation différenciée*)IRD éditions pp.17-24

2008b Des personnes âgées au centre et des jeunes en périphérie (Floraence Fournet, Aude Meunier-Nikiema, Gérard Salem 2008 *Ouagadougou (1850-2004) Une urbanisation différenciée*)IRD éditions pp.51-60

Mitchell, J. Clyde

1966 Theoretical Orientation in African Urban Studies, ASA *The Social Anthropology of Complex Societies* Tavistock Publication Ltd.

Projet ZACA

(出版年度不明)Présentation générale ZACA

Skinner Eliott

1974 African Urban Life : Transformation of Ouagadougou, Princeton University Press

松田素二

1996『抵抗する都市　ナイロビ　移民の世界から』岩波書店

和崎春日

1996『大文字の都市人類学的研究』刀水書房

[新聞]

Sidwaya Paalga 2003.1.9 Plat-forme revendicative minimale des populations de la zone (p.15)

[ホームページ]

Projet ZACA ホームページ　http://www.projetzaca.bf/　(2009.10.20 閲覧)

(しみず　たかお／比較人文学)